

小学校卒業前夜の大阪大空襲



岡田匠さん（82） 昭和8（1933）年 大阪府中央区生まれ
関西電力の支店長の家庭に生まれる。自宅兼支店は心齋橋の近くにあり、大宝国民学校へ通った。国民学校の卒業式のため、集団疎開先だった滋賀県多賀郡多賀町から帰省中の昭和20（1945）年3月13日の第1次大阪大空襲に遭遇。同級生の多くが犠牲・行方不明になった。この空襲により浪速区は区域の98%が焼け、昭和20年10月の人口は戦前と比べ4%となるなど、最も壊滅的な被害を受けた。焼夷弾で焼けた街の中を走り抜けた体験を、小学校などで子どもたちに伝えている。

小学校からの依頼で、戦争体験をお話する機会をいただくことがあります。話がどうしても一方的になりますので、児童が知りたいことに答えたいと、児童から質問書をいただくと、1番質問が多かったのは「どう逃げたか」で、2番目は「どんな仕事をしたかったのか」でした。

生徒さんたちは航空兵や軍人になりたかったという答えを期待していたようですが、私は医者になりたいと思っていました。わたしは姉と父を肺結核で亡くしました。当時結核になったら死を宣告されたようなものです。栄養状態が悪かったので、戦前戦後を通じて流行しました。だから命を救いたいと思うようになったんです。戦争は長く続かないと思っていました。

実家の心齋橋周辺の様子

父親は関西電力の島之内営業所長でした。大きな家で、1階が営業所、私の家族は2階に住んでいました。当時は関西電力で電球の販売交換から高圧線や内線、外線、トランスなどの修理も扱っていたのです。注文があれば扇風機の貸し出しなんかもしていましたね。ご飯は電熱器で炊きました。でも、当時はおかゆを2杯食べるのがやっと。おかずを食べた記憶はあんまりありません。

当時大丸とそごうの間に映画館があって、戦争中はドイツの映画をやっていました。アメリカの映画は見れないので、ドイツの映画ばかり見ていましたね。Uボートや急降下爆撃機など、戦争ものが多かったです。

湊町の駅周辺にはアメリカの捕虜がたくさんいて、使役されていました。昭和19年には御堂筋を行進する陸海空軍も見ました。淀屋橋から難波までそうそうたるパレードでした。戦車、短剣を持った海軍の白い制服が格好よくてね。

また、憲兵は、取り締まりのためによくこのあたりを歩いていました。子どもでも怖かったですね。腕章をし軍刀を持って巡回したり、街角に立っていたり。

大阪大空襲の記憶

昭和20(1945)年3月14日が卒業式だったので、当時国民学校6年生だった私は同級生と一緒に3月の始めに大阪へ帰ってきていました。浪速区の大豊小学校です。久しぶりに家族に会えると電車の中で皆で喜んでいました。しかし、卒業式の前の晩3月13日の夜間から14日にかけて、3時間もの大空襲に遭うことになりました。第1次大阪大空襲です。滋賀の疎開先にいたら生きながらえていたはずですが、同級生の45人中25人が亡くなり、20人が行方不明になってしまいました。5年生以下は疎開先にいて無事でした。8月に帰ったとのことでした。

B29から落とされた焼夷弾は、枝葉に分かれるように広がりながら落ちてくるので、花火のようでした。火が風を呼んで、炎が水平に広がるのを見ました。当時は、焼夷弾に当たると体が溶けてしまうから、絶対に当たらないようにと教育されていました。でも、落ちてきたものは体を溶かすどころか、まちを燃やし尽くすものでした。

最初は私の家には焼夷弾が落ちなかったので大丈夫と思っていたら、あとから火の手が迫ってきたので炎の中を走って逃げました。本当に火の中へ飛び込むようにして走りました。まちは炎とスモッグでひどい状態でした。

当時は火が出れば皆で水をかけて消すことが義務付けられていて、消そうとしている人々もいましたが、自分は違反をして助かったのです。

翌日、御堂筋に出たら大勢の遺体が並べられていていました。人間の感覚というのは怖いもので、それだけ多くなると感覚が麻痺してしまうんですね。火の中で倒れた人や防空壕に逃れた人も皆蒸し焼きになってしまっていて、消防団が掘り起こしてむしろをかぶせていました。遺体は難波まで累々と並んでいました。

途中でB29が落ちているのを見ました。高射砲で撃墜されたものです。中をのぞくと7人が乗っていましたが、驚いたのは戦闘員ではなかったことです。背広

⑬岡田匠さん

を着た人や女性もいて、どうやらプレスだったようです。それでも皆つばをかけたりにしていました。

二度目の疎開中に再び空襲に

学校も燃え、もちろん卒業式は中止。家も財産も全て焼けてしまって生活ができません。岡山へ行こうと現在のJRで逃げました。屋根の上や機関車の前までたくさんの人が乗っていました。すると今度は三宮で17日の神戸大空襲に遭ったのです。私は列車の中にいて助かりました。

人間というのは2～3日食べなくても平気なんですね。空襲から何も食べませんでした。神戸で炊き出しがあって、おにぎりをひとつもらって食べるまで全く空腹を感じませんでした。

岡山の姫新線で津山のほうへ行ったのですが、遠い親戚ではあるけど縁はない家です。許可なしで勝手に逃げていったので、先方からすれば招かれざる客です。小農家だったので自分と子が食べるので必死という感じで、食べるものがなくてどん底生活が続きました。山のタケノコを取って「泥棒！」と大声で叫ばれて、それ以降は村でもものがなくなるとすべてうちのせいにされました。虚弱体質というか、成長期に食べられないので大変でした。大阪にいても食べるものがなかったと思います。疎開先での食事は重湯のような雑炊が多かったですね。食べるものがないから正月に近所の農家へ行くと、親切にご飯を食べさせてくれました。1食だけ、それもおにぎりなどでしたけどね。ある女の子はひもじさのあまり、歯磨き粉を食べていたくらいです。ひもじい思いをしながら、5年ほど暮らしました。悲劇の少年時代でした。

東淀川には昭和30年から住んでいます。少年時代に戦争を体験し貧しい辛い生活でしたが、青年時代になって仕事と結婚で生きがいを取り戻しました。子どもを育てたことも大きかったです。

大空襲のため小学校の卒業証書ももらっていませんし、同窓会をしたことすらありません。戦火に遭い、火の中を走って逃げて。生きているのが不思議なくらいです。私ぐらいの歳になると、みな同窓会を開いて楽しくやっているということなんですが、私たちの同級生の多くは12歳で亡くなってしまいました。

じつは数年前に大宝小学校へ行ってきました。大空襲で家が焼かれて小学校を卒業していないと伝えました。そのとき、「資料室を見ますか」と聞かれたのですが、本当は友達のことを確認したかったのに悲しくなって帰りました。結局資料は確認せず、同窓会も一度もできていなくて。それが心残りなんです。